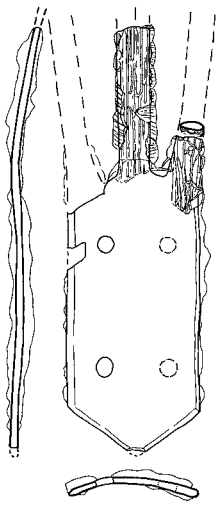
福岡市埋蔵文化財調査報告書第845集

NAGA TARE OO TANI

長垂大谷遺跡

―長垂大谷遺跡第1次調査報告―



2005

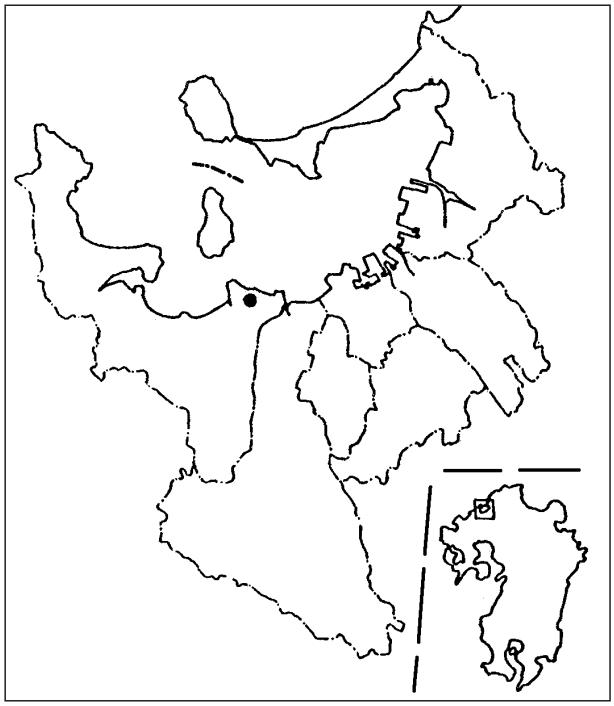
福岡市教育委員会

福 岡 市

NAGA TARE OO TANI

長 垂 大 谷 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第845集



調査番号 0307
遺跡略号 NTO-1

福岡市教育委員会

1．　調査区全景（南から）

2.　７号墳石室（西から）

3．　７号墳出土三尾鉄

序

本市西区の叶岳から長垂山にいたる山稜の東側、早良平野を望む地帯は多くの小古墳が営なまれ、付近には平安京・大宰府鴻臚館の瓦を焼いた斜ヶ浦瓦窯跡、国史跡元寇防塁を擁する生の松原海岸、国指定天然記念物の含紅雲母ペグマタイト岩脈の長垂海岸があり、豊かな自然と史跡にかこまれた地域であります。

近年国道202号線バイパス・外環状線道路の整備、都市高速鉄道開通にともなう筑肥線の高速化等の交通網の整備により、一帯の開発・宅地化が進んでおります。

一方でこれにともなって消滅していく遺跡も多く、本市ではこれら開発によってやむなく失われる遺跡の記録保存調査を行なっております。本書もそうしたなかのひとつで、民間の駐車場造成計画にともなって発掘調査を実施した長垂大谷遺跡の調査報告を収録したものであります。

調査の結果、市内で史跡老司古墳につぐ三尾鉄をもつ衝角付冑や玄界灘沿岸最古級の馬具を副葬した５世紀前半の初期横穴式石室墳をはじめ、縄文時代から古墳時代にかけての重要な遺跡であることが確認され、大きな収獲でありました。

調査に際しご協力をいただいた西鉄不動産株式会社をはじめ関係者各位、また地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝する次第であります。

平成17年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　植木　とみ子

例　　言

1. 本書は西鉄不動産株式会社が計画した西区大字下山門字大谷1718番2外の駐車場造成にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成15年度に実施した長垂大谷遺跡第1次調査の調査報告書である。

2. 本書で用いる方位は磁北で、真北はこれに6°21′東偏する。

3. 遺構の呼称は略号化し、土廣→SK・溝→SD・柱穴→SPとした。

4. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦・辻節子・三谷朗子による。

5. 本書に使用した遺物実測図は加藤・平川敬冶・井上加代子による。

6. 製図は加藤・安野良・副田則子による。

7. 本書に用いた写真は加藤の他、電子顕微鏡写真・透過X線写真は福岡市埋蔵文化財センター片多雅樹による。

8. 三尾鉄組織比較資料の雉・孔雀の羽は片多の手配で福岡市動物園より提供をうけた。

9. 本書の執筆・編集は加藤が行った。

10. 本書にかかわる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査の組織……1

Ⅱ．調査区の立地と環境……2

Ⅲ．調査の記録……4
　１．調査の概要……4
　２．縄文時代の調査……6
　３．弥生時代の調査……10
　４．古墳時代の調査……12

Ⅳ．小結……19

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000）……3
Fig. 2　調査区位置図（1/8,000）……3
Fig. 3　調査区全体図（1/200）……5
Fig. 4　SX01・03・05・06実測図（1/40・03-1/30）……6
Fig. 5　SX02実測図（1/60）……7
Fig. 6　縄文時代出土石器実測図（2/3・1/2・1/3）……8
Fig. 7　SX05・06出土遺物実測図（1/3・1/4）……9
Fig. 8　SB01・SD01実測図（1/60・1/20・1/40）……10
Fig. 9　SD01出土土器実測図（1/3）……11
Fig.10　SB01出土遺物実測図（1/3・1/4）……11
Fig.11　その他の弥生土器実測図（1/3）……12
Fig.12　７号墳石室・墳丘土層断面図（1/60）……13
Fig.13　７号墳石室出土鉄器実測図．１（1/2）……14
Fig.14　７号墳石室出土鉄器実測図．２（1/2）……15
Fig.15　７号墳石室出土鉄器実測図．３（1/2）……16
Fig.16　７号墳石室出土鉄器実測図．４（1/2）……17
Fig.17　７号墳石室出土鉄器実測図．５（1/2）……18
Fig.18　７号墳石室出白玉器実測図（1/1）……19

写　真　目　次

Ph. 1　調査区全景（西から）…… 4
Ph. 2　SX05（北から）…… 7
Ph. 3　SX06（北から）…… 8
Ph. 4　出土縄文時代遺物 …… 9
Ph. 5　SD01（西から）……10
Ph. 6　石碇出土状況（北から）……10
Ph. 7　出土弥生時代遺物 ……11
Ph. 8　７号墳玄室（西から）……12
Ph. 9　７号墳石室堀方（西から）……12
Ph.10　南壁墳丘土層断面（北から）……13
Ph.11　西壁墳丘土層断面（東から）……13
Ph.12　７号墳石室出土鉄器 ……14
Ph.13　三尾鉄出土状況（北から）……15
Ph.14　三尾鉄組織写真 ……16
Ph.15　三尾鉄Ｘ線写真 ……16
Ph.16　Fig.15帯状鉄片 ……16
Ph.17　板鏡78 ……17
Ph.18　板鏡78Ｘ線写真……17
Ph.19　三尾鉄組織（×100)……21
Ph.20　雉羽根（×100)……21
Ph.21　孔雀羽根（×100)……21

表　目　次

Tab. 1　市内甲冑出土古墳一覧表
Tab. 2　三尾鉄出土古墳一覧表

Ⅰ．はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市西区下山門字大谷で、西鉄不動産株式会社が計画した、駐車場造成にともなって実施された緊急発掘調査である。事業策定に当たって埋蔵文化財の有無の照会のため、平成14年11月11日同社から事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された事により始まる。申請面積は19,122㎡、受付番号は14－2－582である。

埋蔵文化財課で確認した所、申請地内に長垂山古墳群がかかり、長垂大谷遺跡が隣接するため同年11月20日現地踏査を行つた。結果申請地の北西側の丘陵上に遺跡と古墳の存在の可能性が考えられたため12月17日試掘調査を実施し、弥生時代終末期の柱穴と、丘陵先端部で古墳の残丘の可能性のある高まりを確認した。

同課では設計変更等での現況での保存が可能か申請者と協議を重ね、結果として保存は困難と判断、事前の発掘調査を実施する事となり、調査に関して同社と教育委員会とで委託契約が締結された。

発掘調査は平成15年4月14日に着手、表土剥ぎを終了した時点で前任者が移動となったため、調査担当者を交代し、同年5月30日に全ての行程を終了した。

調 査 番 号	0307	遺 跡 略 号	NTO-1
調 査 地 地 籍	西区下山門大谷1718-2外	分布地図番号	103（長垂）
開 発 面 積	19,122㎡	調査実施面積	620㎡
調 査 期 間	030414～030530	事前審査番号	14-2-582

2. 調査の組織

【調査委託】西鉄不動産株式会社
【調査主体】福岡市教育委員会　教育長　生田征生（当時）
【調査総括】文化財部長　境徹(当時)　文化課長　山崎純男(当時)　調査第１係長　力武卓治(当時)
【調査庶務】文化財整備課　後藤泰子
【発掘調査】瀧本正志（前任・当時）加藤良彦
【発掘作業】梅野眞澄　木田ひろ子　柴藤清志　田中肇　辻節子　辻哲也　徳永洋二郎　永井ゆり子
西川吾郎　西口キミ子　古庄孝子　松本順子　三谷朗子
【整理作業】芦馬恵美子　木村厚子　国武真理子　竹田幸子　平川泰世

Ⅱ．調査区の立地と環境

本調査区は福岡市の都心部より西へ6.5mの博多湾岸、室見川が貫流する早良平野と、高祖山麓・瑞梅寺川に限られた今宿平野とを、東西に分かつ背振山系から飯盛山・叶岳・長垂山へとつらなる山塊の長垂山北東、標高10～12m幅15m程の舌状丘陵上先端部に位置する。行政的には福岡市西区下山門に所在する（Fig.1)。

周辺の歴史環境を概観してみると、旧石器・縄文早期の遺跡は山麓部と洪積台地に点在しており、羽根戸原遺跡・吉武遺跡群・有田遺跡群でナイフ型石器・細石器が、羽根戸遺跡・広石遺跡群・名切谷遺跡・笠間谷古墳群で土壙・集石炉・押型文・条痕文・撚糸文土器・石槍・石鏃が検出されている。前期は沖積地の微高地上まで進出し、四箇遺跡群・湯納遺跡・田村遺跡で轟B式土器・曽畑式土器・竪穴・ドングリピット等が検出されている。中・後期では吉武遺跡群でドングリピット50数基・有田遺跡で貯蔵穴様ピット60数基・四箇遺跡群で埋甕・竪穴・竪穴住居・特殊泥炭層(堅果類果皮の多量堆積一ヒョウタン・リョクトウ出土)が出土。晩期では突帯文の時期に増大し、有田七田前・十郎川・橋本一丁田・拾六町ツイジ・四箇・四箇東・田村遺跡などで大陸系磨製石器・木製農耕具未製品・矢板列・埋甕・竪穴住居等が検出されている。

弥生時代前期前半は前代と重なって海岸部の中・低位段丘上に多く、有田遺跡には300×200mの大規模な環濠が出現し、藤崎遺跡では土壙墓群が見られる。前期後半からは内陸平野部にも集落が展開し、吉武遺跡群では「早良王墓」として世間を賑わした、多数の青銅器を副葬した木棺・甕棺墓群が検出。中期にはさらに面的な広がりを見せ、内陸奥部にまで及ぶ。海岸部の西新町遺跡では無文系土器・板状鉄斧と含鉄鉄滓・ガラス容器・ガラス玉、姪浜遺跡では無文土器・南海製貝玉・漢式銅鏃・瀬戸内系甕など海洋拠点的な様相を示し、吉武遺跡群は拠点をして更に発展し甕棺墓は1,000基以上、墳丘墓も検出された。またこれに次ぐ集団として、東入部遺跡群で甕棺130基中より細形銅剣1・銅釧10・素環頭刀子1・鉄矛1・鉄刀1・鉄剣1・鈍1を検出している。今宿平野側では後期の多量の九州系石錘と小銅鐸・インドパシフィックガラス玉・貨泉を出土した今宿五郎江遺跡がある。

弥生終末から古墳時代前期にかけては海岸部に西新町・藤崎・五島山・姪浜・生の松原・今宿遺跡があり、石棺墓.・方形周溝墓・竈を持つ住居等が検出され、三角縁鏡などが出土。多くの漁具と引き続き半島系土器を多く出土する。平野部では野方中原・.野方塚原・.野方勧進原・.飯盛谷・広石遺跡群・宮ノ前C地点・重留・有田遺跡で石棺墓.・方形周溝墓・墳丘墓・住居等が検出され、後漢鏡などが出土している。中期では吉武で円墳28基・'帆立貝式墳(樋渡古墳)・方墳(樋渡2号墳)・掘立柱建物・大壁建物・竪穴住居・半島系土器多数が検出され、重留では70m級の前方後円墳(拝塚－重留1号墳)・方墳(重留2号墳)があり、梅林では27mの小型の前方後円墳を検出している。今宿平野側では初期竪穴系横口式石室を持つ鋤崎古墳・丸隈山古墳が築造される。６世紀前半～中頃にかけ山麓部の羽根戸・羽根戸南古墳群で古墳群の造営が始まり６世紀の後半以降金武・野方・広石・コノリ・高崎・草場古墳群等金武から長垂山麓にかけにわかに増大する。鉄滓供献が見受けられるのも共通する。本古墳群もこのなかに位置する。広石遺跡群ではこの時期から７世紀代にかけ桁行４間以上の掘立柱建物９棟を含む26棟・竪穴住居43戸の集落を検出している。

歴史時代では製鉄関連遺構と建物群の下山門敷町遺跡、塔心礎が残る奈良から平安時代の城の原廃寺、「警固」「伊貴作瓦」「今行」銘を持つ平安京・大宰府鴻臚館の瓦を焼いた斜ヶ浦瓦窯址、積み出し港に近いのか生の松原遺跡では同期の瓦を多く検出する。海岸線には生の松原元寇防塁がある。

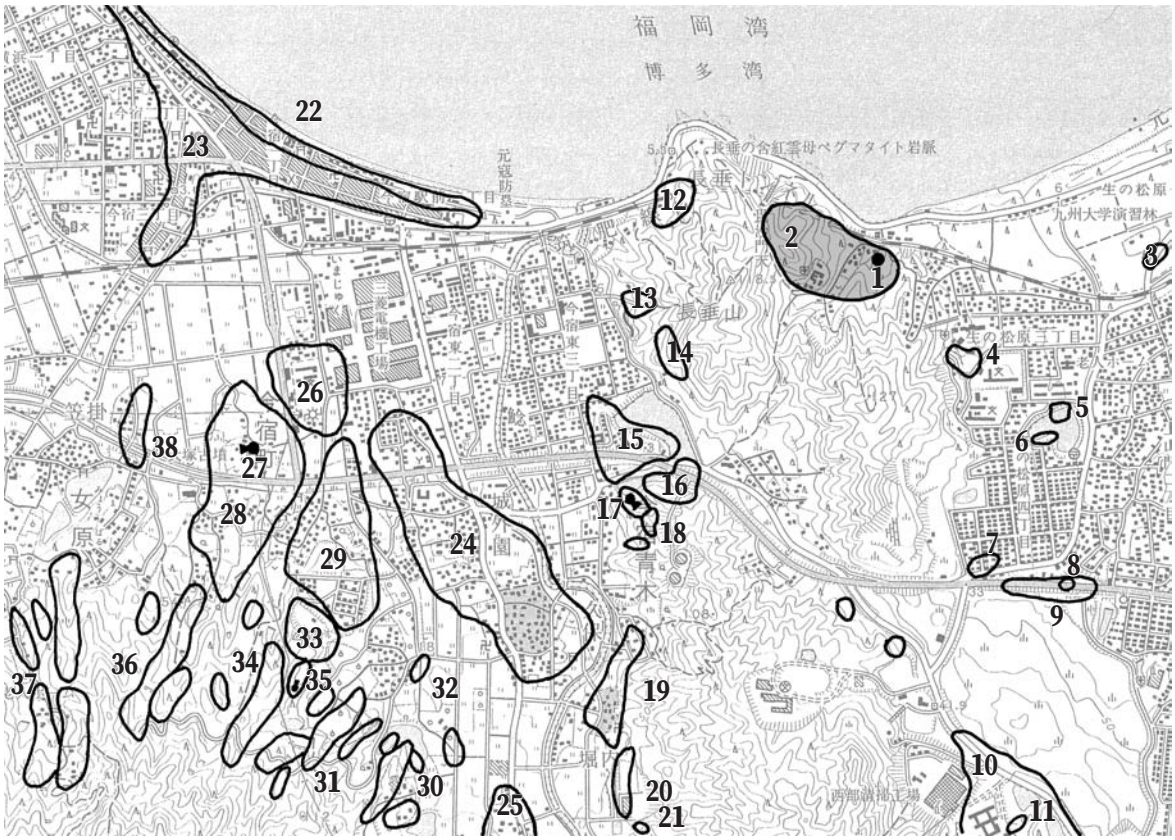


Fig.1　周辺遺跡分布図（S=1/25,000）

1.長垂大谷遺跡 2.長垂山古墳群 3.生の松原遺跡 4.草場古墳群 5.斜ヶ浦瓦窯跡 6.斜ヶ浦製鉄遺跡 7.草刈古墳群 8.高崎古墳群 9.大又遺跡 10.広石遺跡群 11.広石古墳群 12.油坂古墳群Ｂ群 13.ショウガ谷製鉄跡 14.油坂古墳群Ａ群 15.鋤崎遺跡 16.鋤崎古墳群 17.鋤崎古墳 18.鋤崎製鉄Ｂ遺跡 19.堀の内遺跡 20.堀の内製鉄遺跡 21.焼山古墳群Ｂ群 22.元冠防塁 23.今宿遺跡群 24.青木遺跡群 25.本村遺跡 26.今宿五郎江遺跡 27.大塚古墳 28.大塚遺跡 29.谷遺跡 30.相原製鉄Ｂ遺跡 31.相原古墳群 32.相原製鉄Ａ遺跡 33.青木城跡 34.谷上古墳群 35.谷上Ｂ１号古墳 36.新開古墳群 37.女原古墳群

Fig.2　調査区位置図（S=1/8000）　0509.長垂古墳群　0505.長垂大谷遺跡　0510.草場古墳群

III. 調査区の記録

１．調査の概要

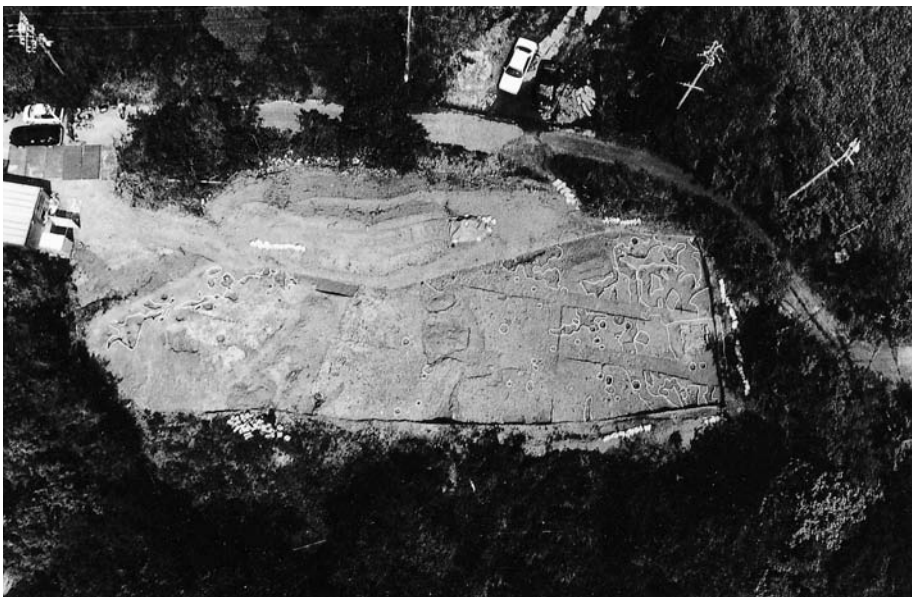
本調査区は、早良平野の西端、長垂山から北東に派生する標高10～12m程の小丘陵先端部に位置する（Fig.2）。おもな遺構は30～40cm程の、縄文～弥生時代遺物を包含する黄灰～暗黄灰色土下の赤褐色花崗岩バイラン土上で検出される。

検出した遺構は縄文時代早期の倒木痕・自然流路等10基、弥生時代終末期の溝１条・1×2間の掘立柱建物1棟他柱穴多数、墳径12.5m程の古墳時代中期の横穴式石室古墳１基（長垂山７号古墳）を検出した。

遺物としては縄文時代では早期押型文土器・石皿・磨石・石匙・石鏃・黒耀石・サヌカイト剥片が、弥生時代では外来系を含む終末期土器片と滑石製碇石、古墳石室からは三尾鉄を含む衝角付冑残片・肩鎧と思われる帯状鉄片多数と鉄鏃・馬具・土師器片・滑石製臼玉多数を検出した。

弥生終末期の円形滑石製碇石は掘立柱建物柱穴の底面に、平面を上にして根石として据えられて出土した。近畿系の土器を含め強い海洋性を示している。

長垂山７号古墳は削平され石室の腰石が残る程度で、石室前半部も残っていない。玄室幅は190cmを測り、西に開口している。奥壁は長さ50～90cm・高さ30cm程の低い花崗岩の腰石３石からなり、この上に幅20厚10cm程の亜角礫を小口に積んだものが２石残存する。古い形態を残している。床面には厚さ５～10cm程の小亜角礫を敷くが、床直上まで攪乱を受けている。奥壁より290cm手前の位置に80cm間隔で径25cm程の２本の柱穴があり、木扉の支柱と思われる。覆土がしまっておらず、後世に玄室を祠堂に転用した際に付け加えられた可能性が高い。墳丘は、石室に近接する南と西の調査区壁の包含層上に、厚さ20cm程赤褐色バイラン土の墳丘盛土が観察される。石室を中心に復元すると径12.5m程の周溝をもたない円墳になると思われる。遺物は玄室右奥を中心に三尾鉄を含む衝角付冑残片・肩甲と思われる帯状鉄片多数と鉄鏃、滑石製臼玉多数と、近畿首長墓級の特筆すべき武具・馬具を検出した。各型式からTK216並行期で、馬具は玄界灘沿岸で最古期の評価がなされている。土器は土師器小片のみで、須恵器は検出されなかった。



Ph.1　調査区全景（西から）

Fig.3　1次調査遺跡全体図（S=1/200）

２．縄文時代の調査

縄文時代の資料は地山のバイラン土上で黄灰色土を覆土として検出される。上面に20～30㎝の堆積があり包含層と考えられる。検出されたのは倒木痕や自然流路などで、丘陵東側の落ち際中心に分布する（Fig.3)。早期・後晩期の少量の遺物が流れ込んだ状態で検出される。明確な遺構はない。

SX01（Fig.4） SX01は調査区南西落ち際に位置する自然流路で、3.1×1.6深さ0.2mを測る。

出土遺物（Fig.6）１は11×6㎜の黒耀石縦長剥片を用いたuflで、打面を主剥離側から折断し、両側を使用している。新旧２種の風化面があり、早前期の素材を後晩期に用いたとおもわれる。

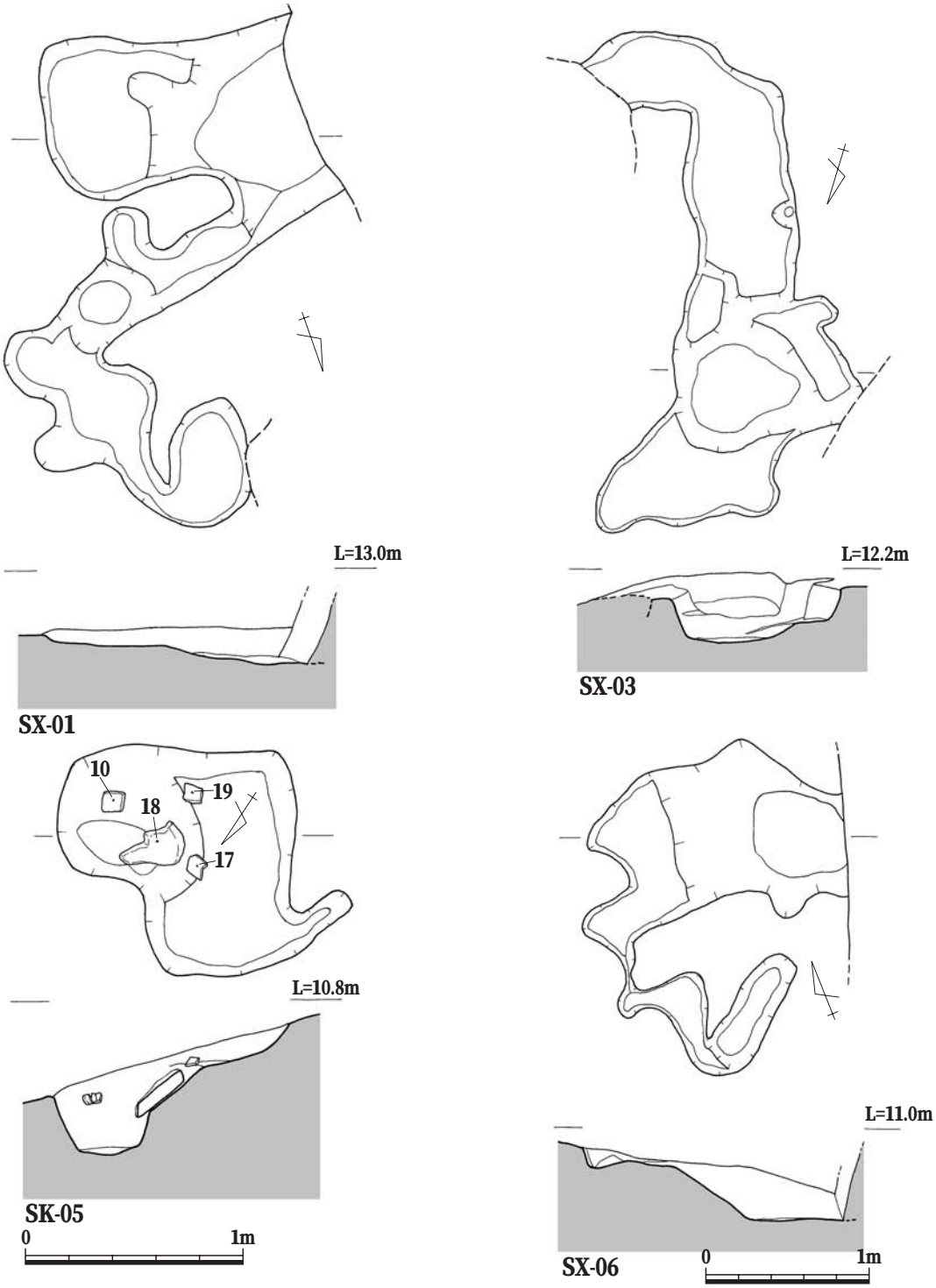


Fig.4　SX-01・03・05・06実測図（S=1/40・1/30）

SX02（Fig.5） SX02は調査区南東に位置する樹木根痕で、5.5×5.5深さ0.3mを測る。

出土遺物（Fig.6） 2は黒耀石製の剥片鏃で15×9×2.5㎜を測る。先端が欠け使用痕跡をのこす。一部に鋸歯状の調整剥離があり後期段階とおもわれる。3・4・5は幅11～13㎜の黒耀石縦長剥片を用いたufl。主に主剥離側から折断した打面部分の剥片で、剥片鏃素材を折り採った残片を再利用している。量がまとまっており、付近で剥片鏃を作成していたとおもわれる。6は黒耀石製のufl。7はサヌカイト製の鏃で、27×25×10㎜を測る。身が厚く晩期から弥生前期と思われる。

Ph.2　SX-05（北から）

SX03（Fig.4） SX03はSX02の北側に位置する樹木根痕で、2.95×1.8深さ0.4mを測る。

出土遺物（Fig.6） 8は黒耀石剥片鏃素材の折断剥片を転用したufl。主剥離側から折断。9はサヌカイト製のやや大型の縦長uflで72×43×14㎜を測る。同様に後晩期と思われる。

SX05（Fig.4） SX05は調査区北東丘陵落ち際に位置する倒木痕で、1.4×1.4深さ0.8mを測る。谷側が柱穴状に一段深く、石皿と押型文土器片が壁面に接して検出される。

出土遺物（Fig.7）

16は口縁が外反する押型文土器で、外面は径7～8㎜の扁平な縦位の楕円押型文を、内面はヨコケンマを施す。胎土は2㎜前後の石英粒を多く含み、1㎜以下の細かな気泡を多く含む。口径40㎝以上の大型品となる。17は摩滅で不鮮明であるが外面に斜位の条痕文か撚糸文を、内面はヨコケンマを施す。胎土は16と同様。18は花崗岩の扁平亜角礫を用いた石皿で、端部を欠くが415×304×85㎜を測り、使用のため中央が25㎜程窪む。早期中頃。

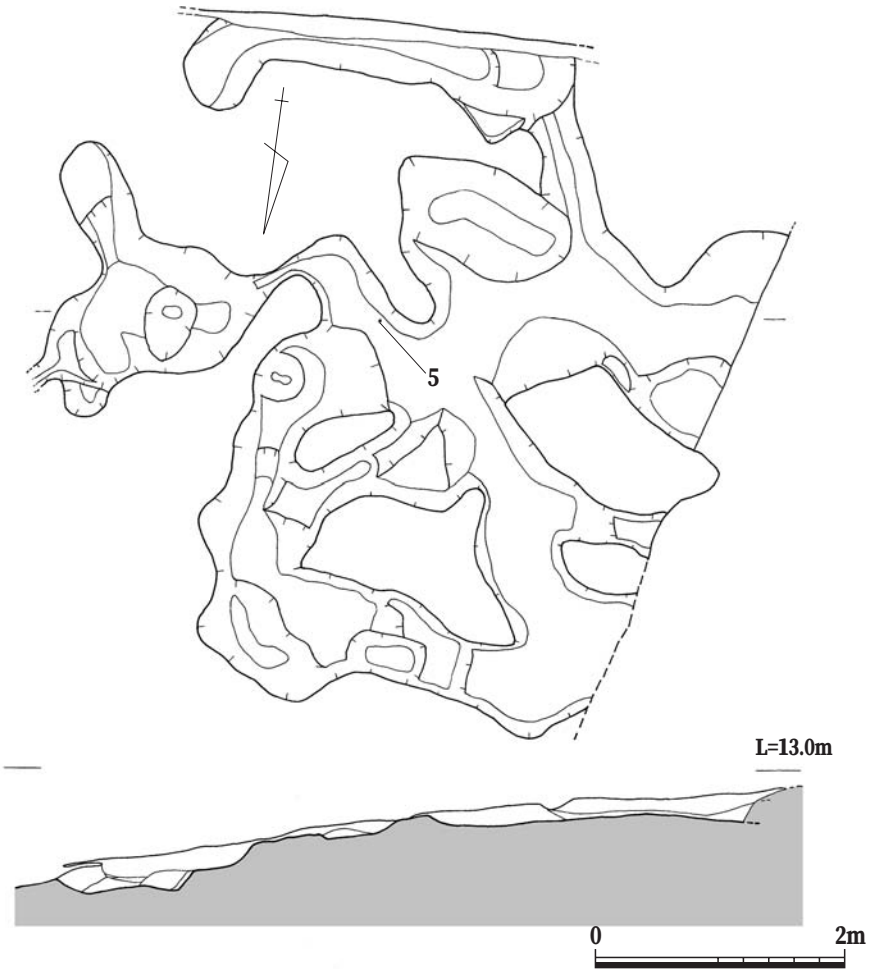


Fig.5　SX-02実測図（S=1/60）

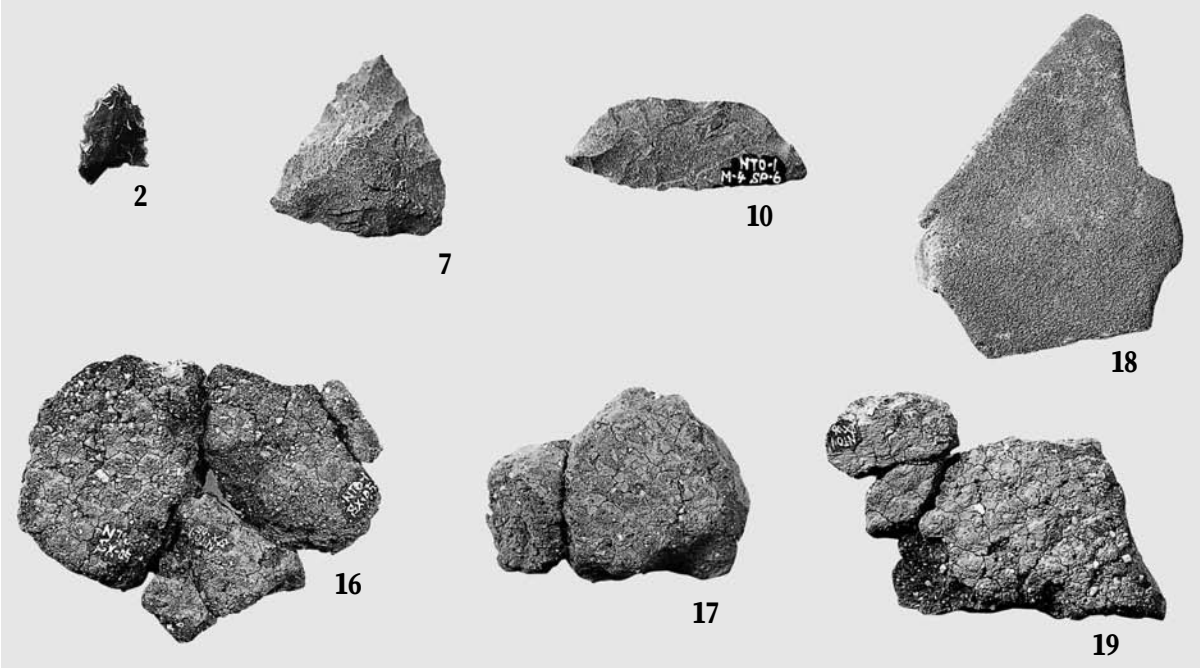
Ph.3　SX-06（北から）

SX06（Fig.4）　SX06はSX05の4m南の丘陵落ち際に位置する倒木痕で、2.1×1.6深さ0.45mを測る。

出土遺物（Fig.7）19は16と同個体と思われる楕円押型文深鉢の口縁部片で、調整・胎土ともに同様。早期中頃。

10～15は混入・検出面出土石器で、10はサヌカイト製の小型横長石匙で摘部を欠く。38×14×2㎜を測る。11は玄武岩製の磨石。80×74×32㎜を測る。12～15は黒耀石uflで、12～14は縦長剥片打面片。

Fig.6　縄文時代石器実測図（S=2/3・9=1/2・11=1/3）



Ph.4　出土縄文時代遺物

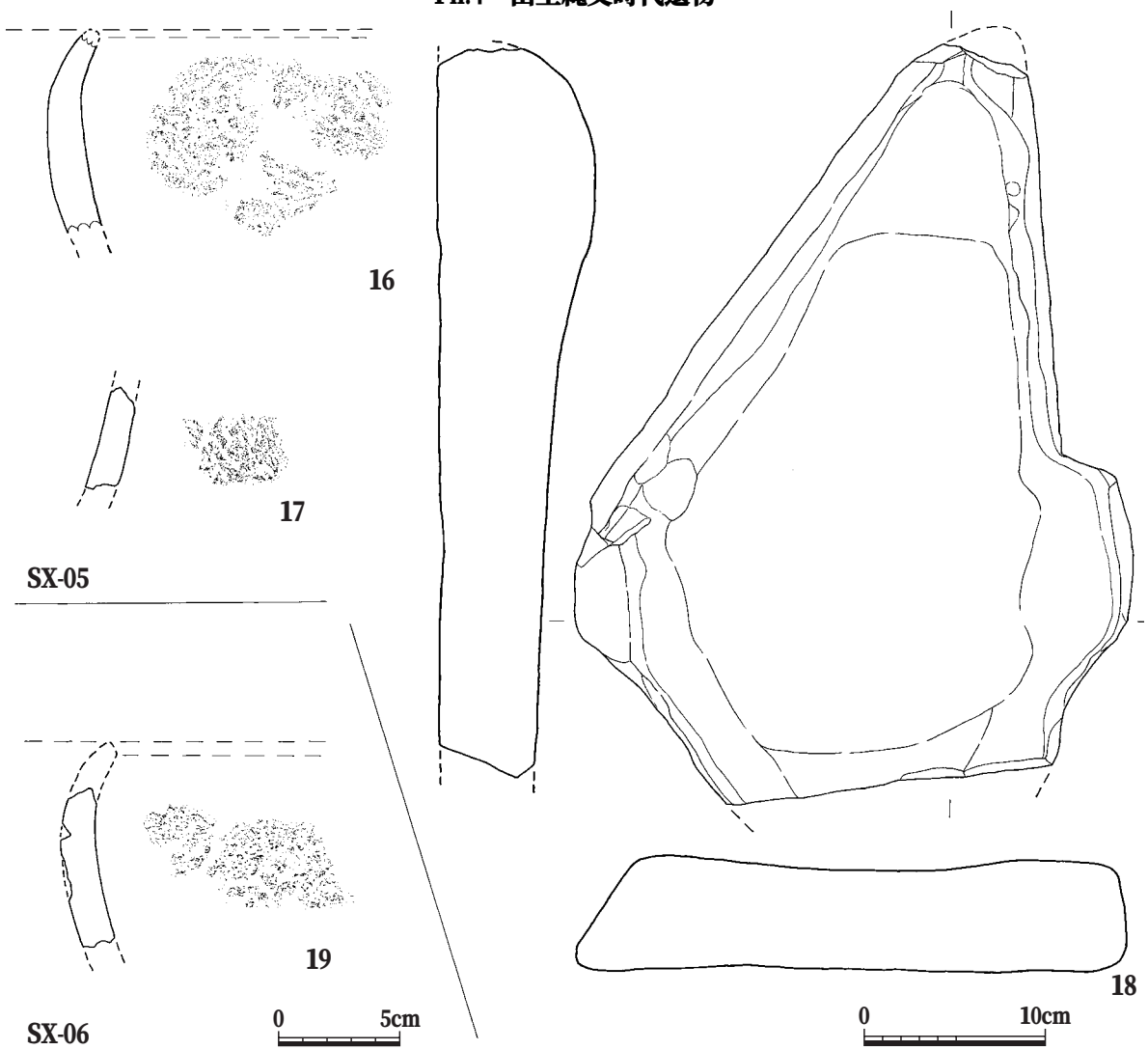


Fig.7　SX-05・06出土遺物（S=1/3・18=1/4）

３．弥生時代の調査

弥生時代の遺構は調査区南半部に集中し、地山のバイラン土上で暗黄灰色土を覆土として検出される。縄文包含層黄灰色土上に10～20㎝の堆積があり該期の包含層となる。殆どの資料は終末期である。古墳下で溝SD01を、これを切って1×2間掘立柱建物SB01を、他数個の柱穴を検出した。

Ph.5　SD-01（西から）

Ph.6　石錘出土状況（北から）

SD01（Fig.3・8） SD01は調査区南部で東西方向にクランクを描いて不整形で11mのび、一部が墳丘の内縁に沿う。幅1m弱深さ30㎝程を測る。中央部で鉢1点が検出された。

出土遺物（Fig.9）

20は溝中央部で出土した(Ph.5)小型の鉢で、口径14器高6㎝を測る。小さな底部が浅い

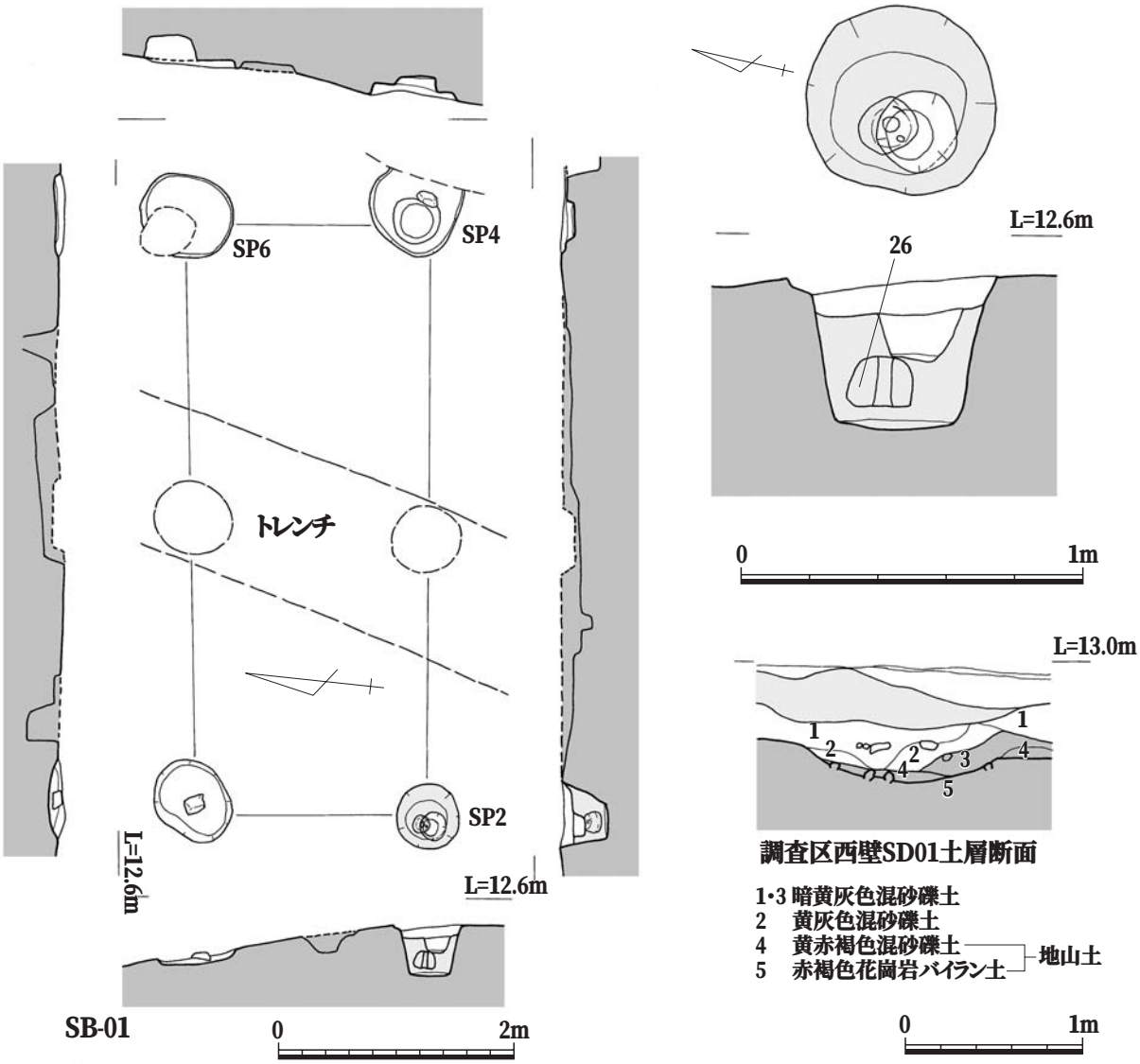
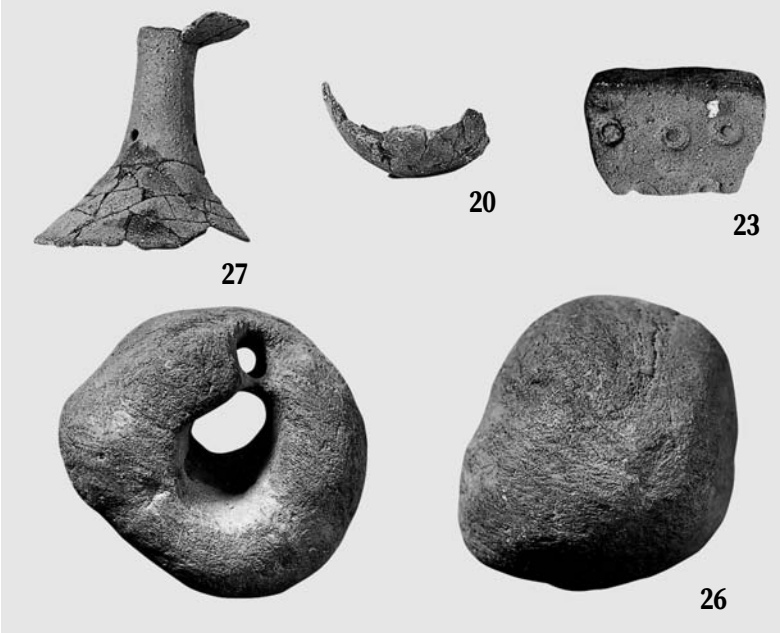


Fig.8　SB-01、SD-01実測図（S=1/60・1/20・1/40）



Ph-7　出土弥生時代遺物

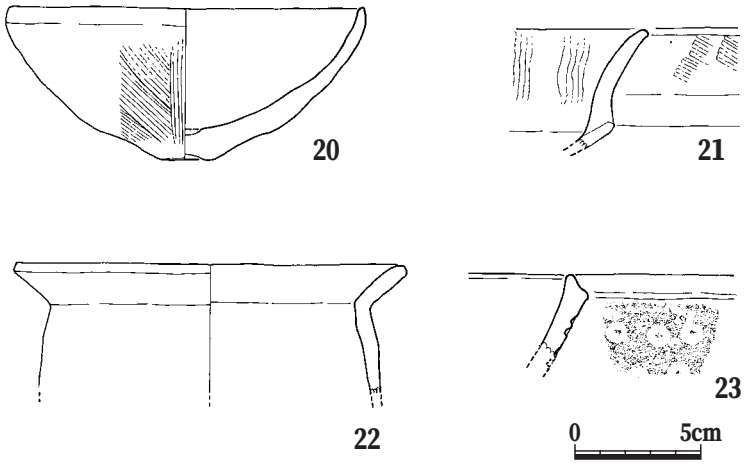


Fig.9　SD-01出土土器実測図（S=1/3）

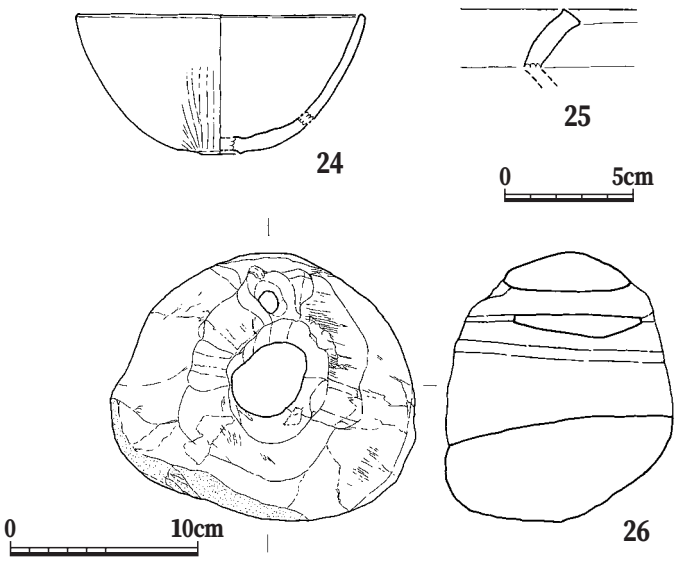


Fig.10　SB-01出土遺物実測図（S=1/3・26=1/4）

上げ底をなす。胎土に角閃石を少量含む。21は高坏の坏部小片。外面に暗文風のタテケンマを残す。22は甕口縁部小片で、復元口径15.4cmを測る。23は外面に径8mm1.5cm間隔で２段に竹管文を施す近畿系の二重口縁壺口縁小片。終末期。

SB01（Fig8） SB01は調査区南西部でSD01を切って検出された。1×2間の建物で、4.95×2.0、柱穴は柱径20～25cm円形堀方径50～80cmを測る。方位をN－82°－Eにとる。中柱部分をトレンチが横切っており、浅い柱穴の深さが10cm未満であり、試掘時に削平されたものと判断した。柱穴SP01内からは径16cmの円形滑石製碇石を底面に、平面を上にして根石として据えて出土した（Ph.6）。

出土遺物（Fig.10）24は20同様小さな上げ底の小型鉢でこれより深い器体となる。復元口径11.2器高5.5cmを測る。25は甕口縁部小片。26は根石に転用した滑石碇石で、160×140×120mm2.85kgを測る。中央に径42上方に14mmの孔を穿ち中央は横と斜上方、小孔は斜上方に著しい紐ずれがみられ、反対位置の底面は海底との擦れで3cm程減っている。終末期。

27～31はその他の出土資料で（Fig.11）、27はSP08・10出土の高坏で完形に近い。口径33.4器高24.8cmを測る。破砕して二つの柱穴に納めたもので建物の可能性を示す。28は鉢の口縁小片、29・31は高坏脚部小片、30は後期前葉の甕底部、32は甕胴部片を円形に打欠いた土器片円盤で5.8×4.8×0.8cm。

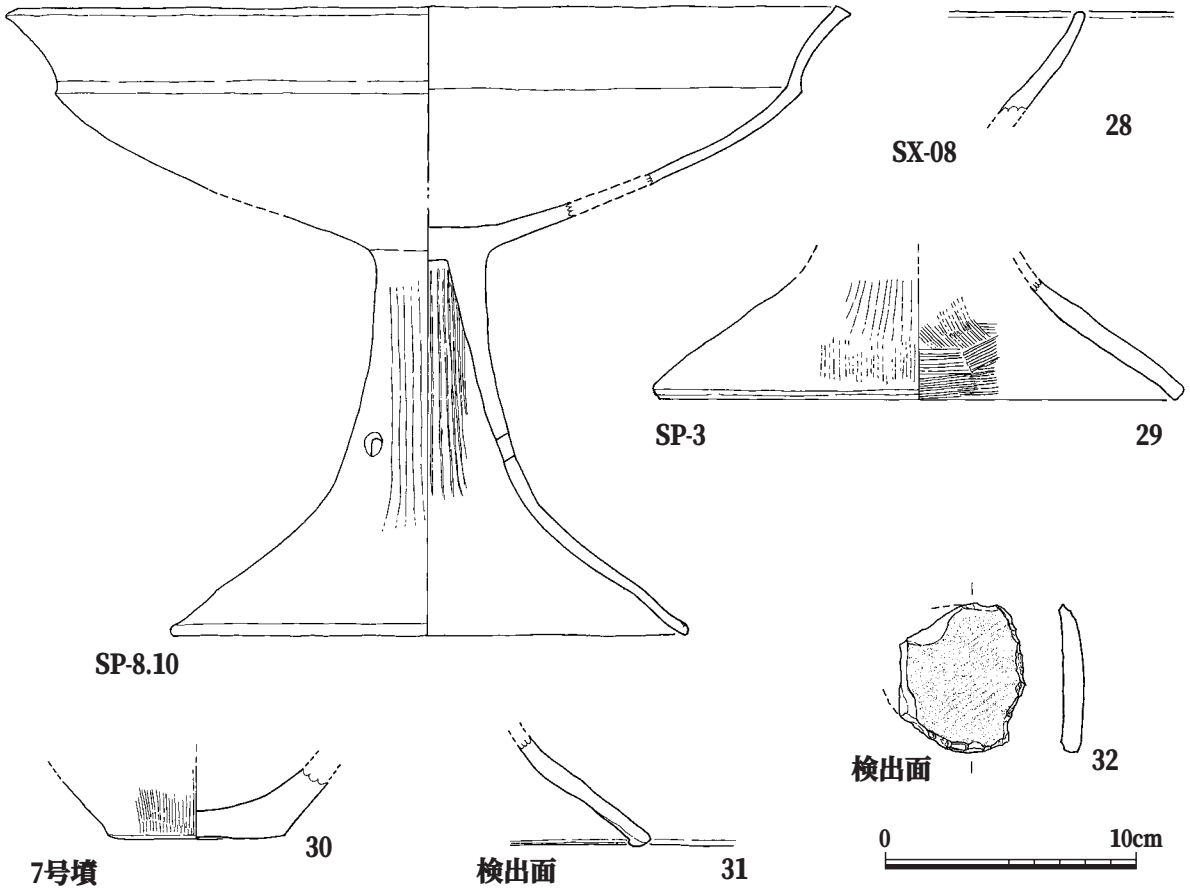


Fig.11　その他の弥生土器実測図（S=1/3）

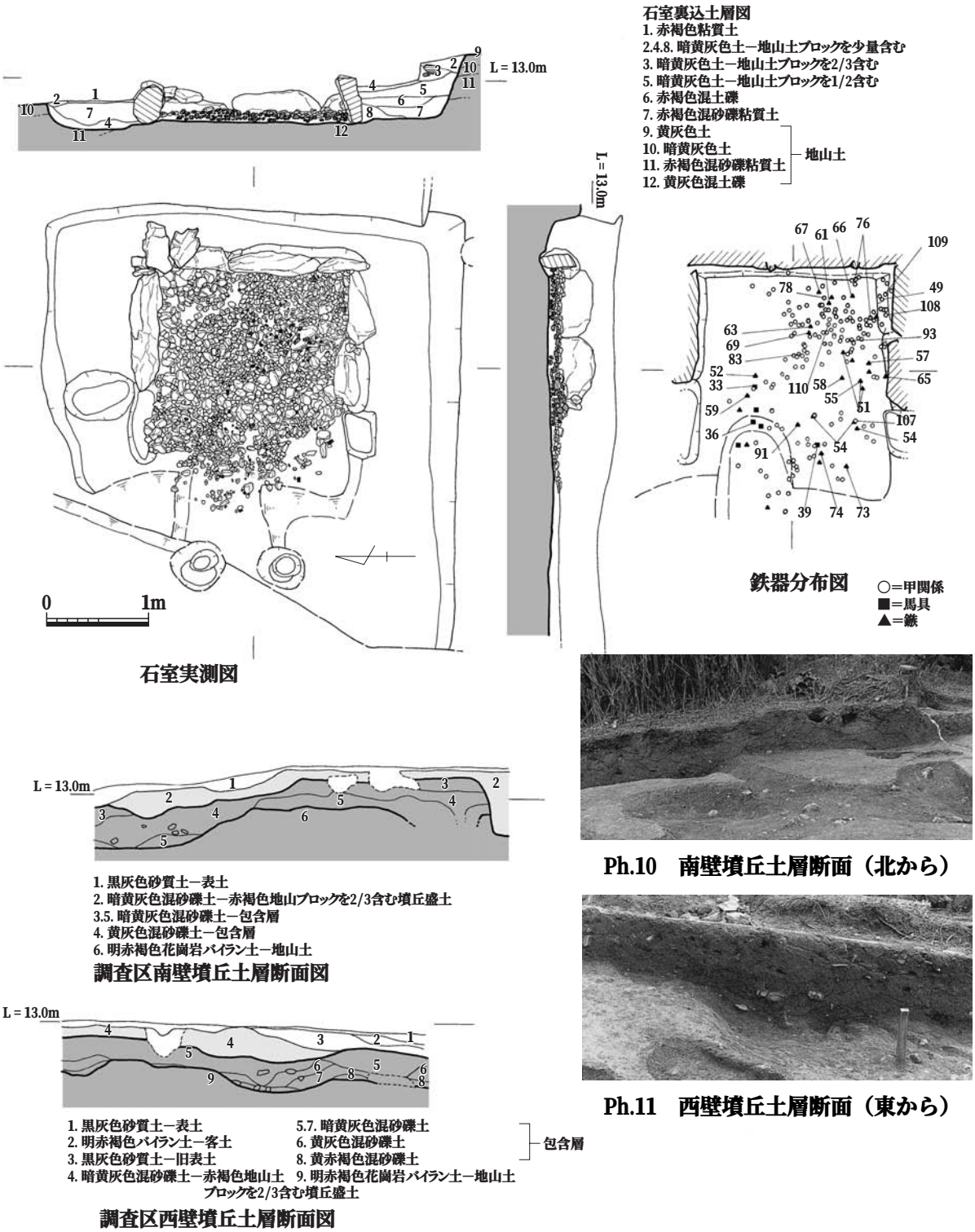
４．古墳時代の調査

古墳時代の遺構は調査区南端で検出された長垂山７号墳1基のみである。試掘時には丘陵先端の高まりを古墳の可能性ありと判断、これを７号墳と付記されたが、表土剥ぎ時に南端で新たに石室を検出、丘陵先端の高まりは旧病院庭園の築山の誤認であることが確認されたため、改めて南端の石室に7号墳と付記した。試掘時に古墳と確認できずバイラン土の墳丘盛土を新しい客土と誤認したため、盛土は地山直上まで削除、石室墓壙端部もトレンチで削除され、全容の解明を困難にしている。

Ph.8　７号墳玄室（西から）

Ph.9　７号墳石室掘方（西から）

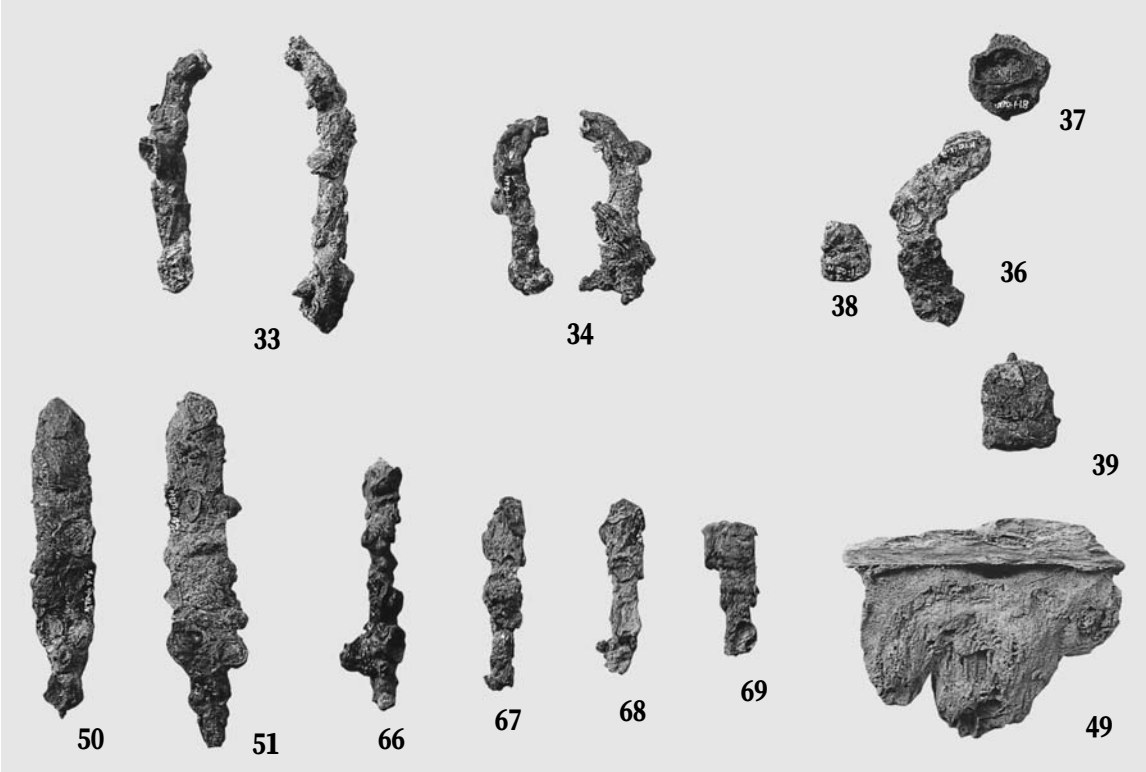
石室（Fig.12）石室は庭園造成時に削平を受けた様で、石室の腰石が残る程度で、石室前半部も削平されている。玄室は主軸をN－85°－Eにとり西に開口している。奥壁幅は190cmを測り、長さ50～90cm・高さ30cm・厚さ10～25cm程の低い花崗岩の腰石３石からなり、この上に幅20厚10cm程の亜角礫を小口に積んだものが２石残存する。右側壁は同様の２石と石抜き址1を含めて225cm、左側壁は1石と石抜き址1を含めて200cmが残存する。表土剥ぎ時にA128×28×26・B70×30×20・C66×35×20・D95×30×33cmの腰石様の４石が掘り出されており、右側壁にC・Dプラスで298cm左側壁にA・Bプ



Ph.10　南壁墳丘土層断面（北から）

Ph.11　西壁墳丘土層断面（東から）

Fig.12　７号墳石室・墳丘土層断面図（S=1/60）



Ph.12　７号墳出土鉄器

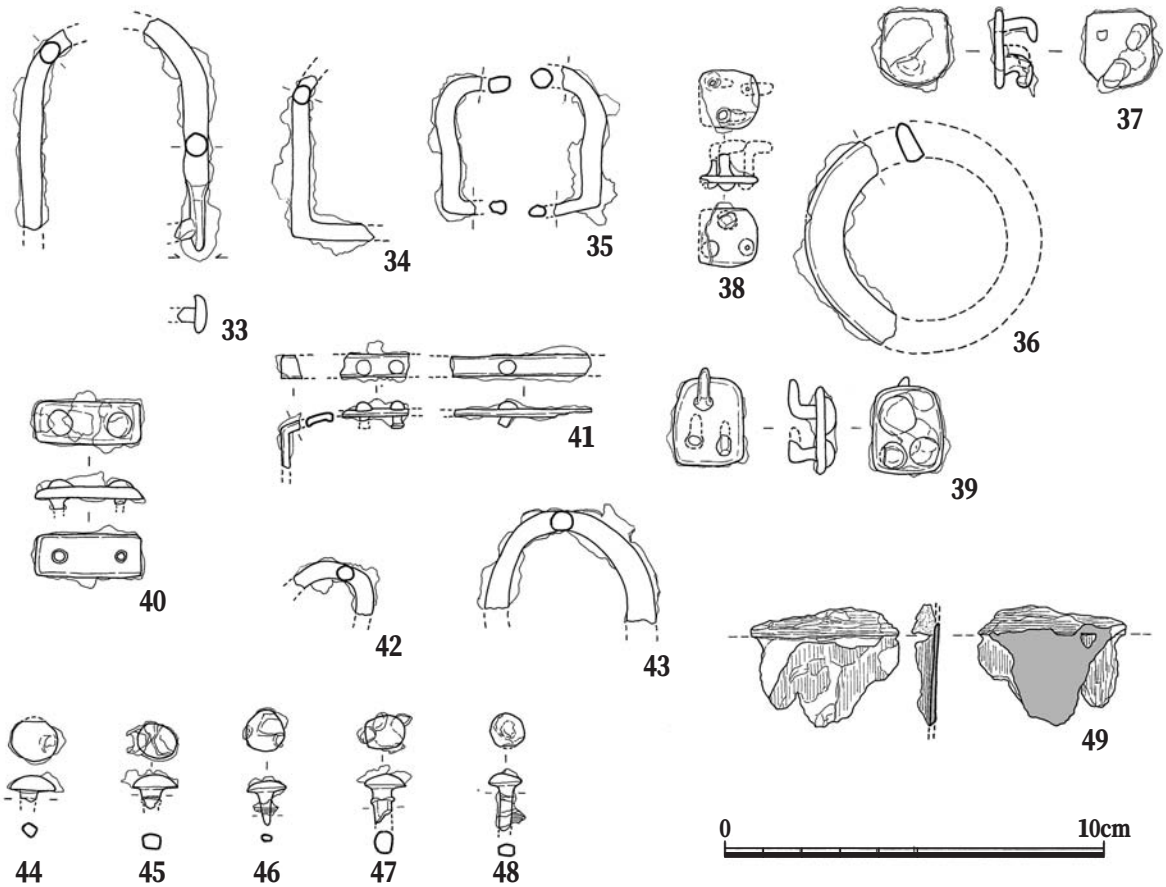


Fig.13　７号墳石室出土鉄器実測図.１（S=1/2）

Ph-13　三尾鉄出土状況（北から）

ラスで313cmと近い数値をしめし、側壁は４石で構成された可能性が高い。また、奥壁より290cm手前の位置に80cm間隔で径25cm程の２本の柱穴があり、木扉の支柱と思われる。覆土がしまっておらず、後世に玄室を祠堂に転用した際に付け加えられた可能性が高く、これが玄門の位置を示すものとすれば玄室長280cm前後に復元される。他にE125×56×20・F138×71×18cmの平行四辺形の板石が2石表土剥ぎ時に検出されており、左右袖部の板石の可能性がある。床面には厚さ５～10cm程に小亜角礫を敷くが、床直上まで攪乱を受

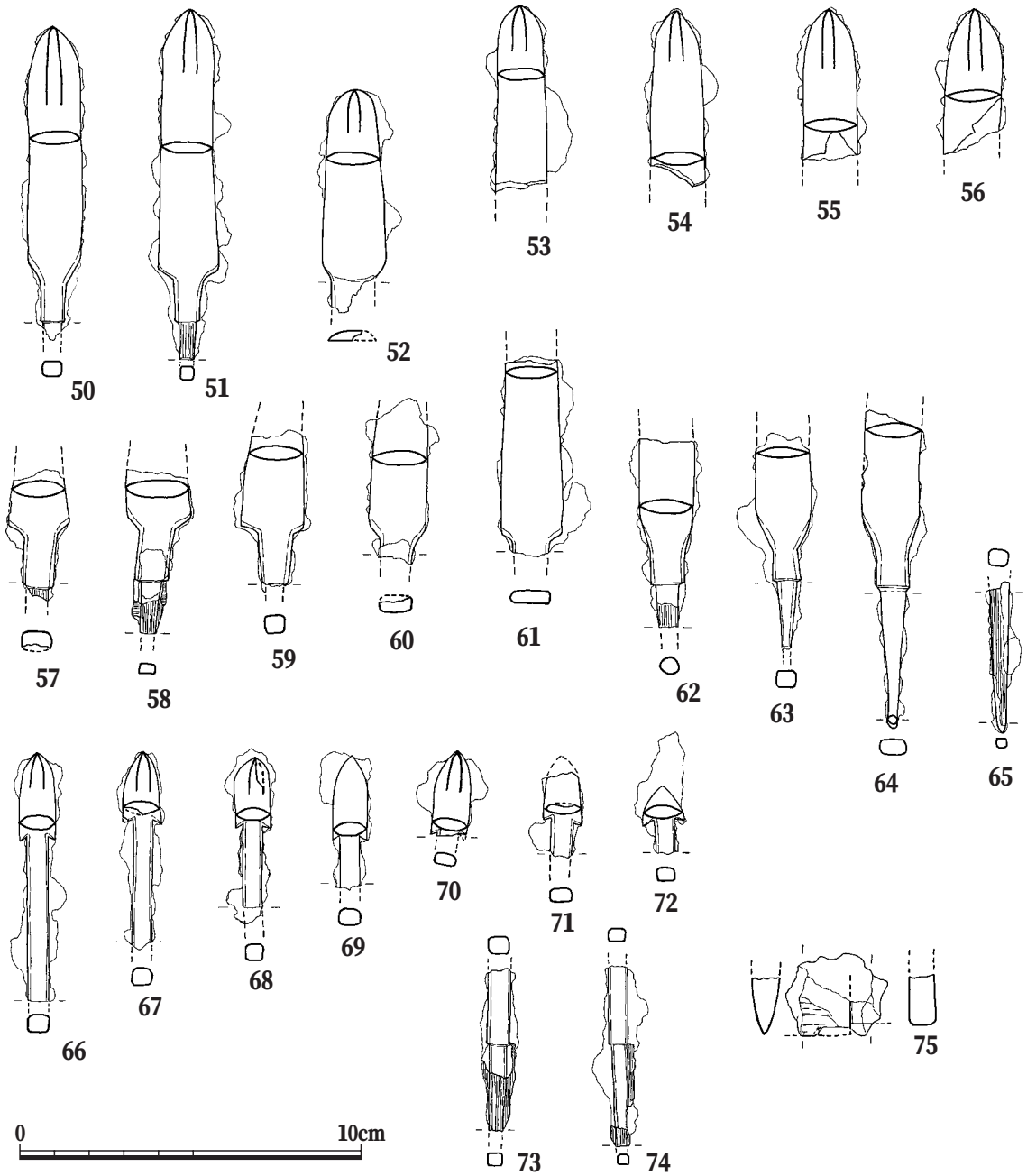
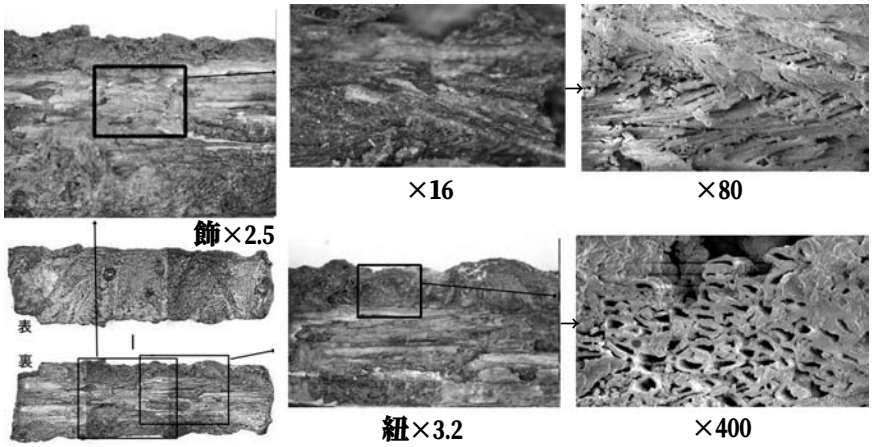
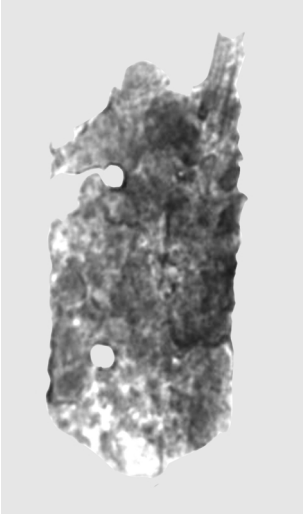


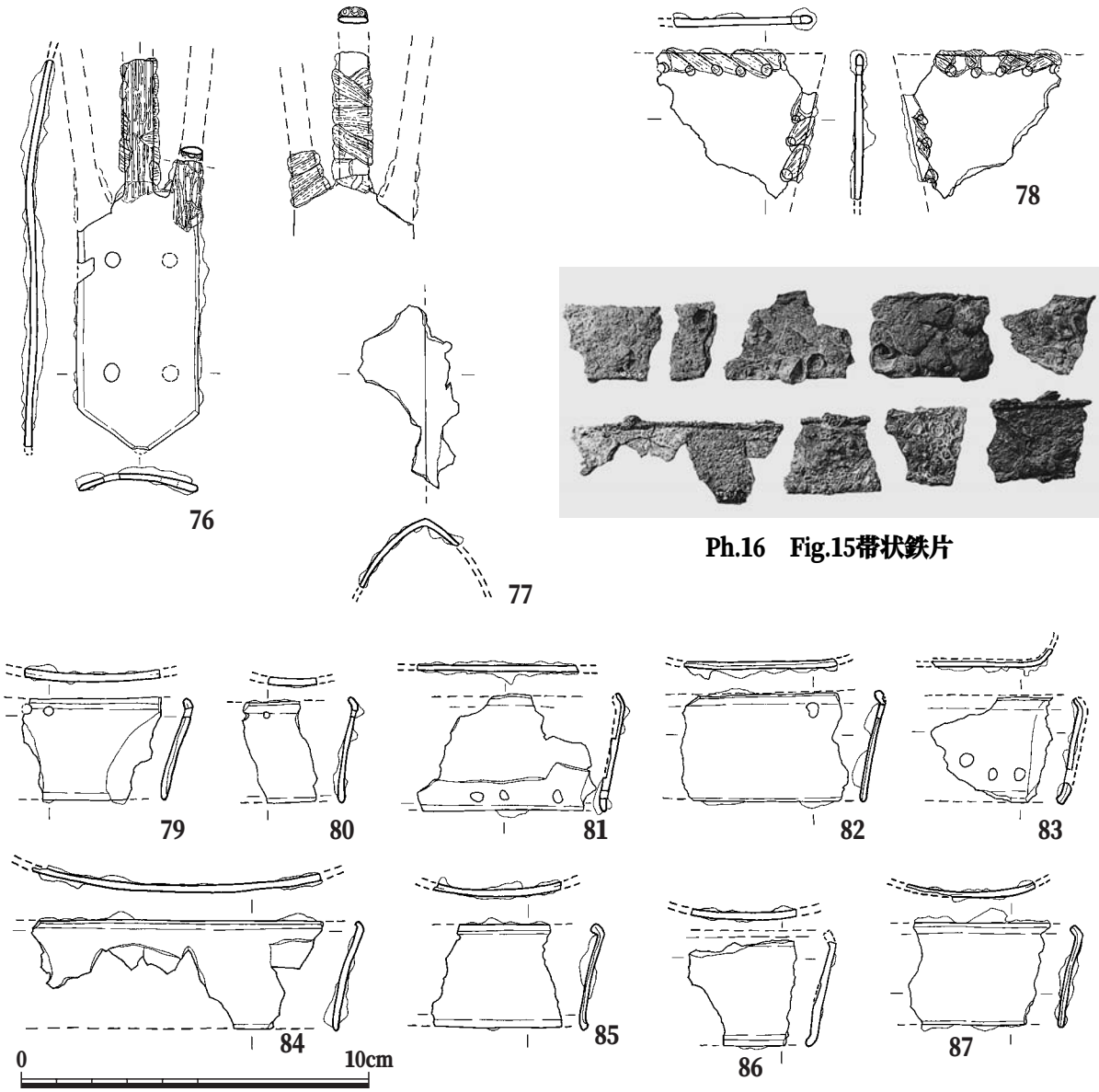
Fig.14　７号墳石室出土鉄器実測図.２（S=1/2）



Ph.14　三尾鉄組織写真

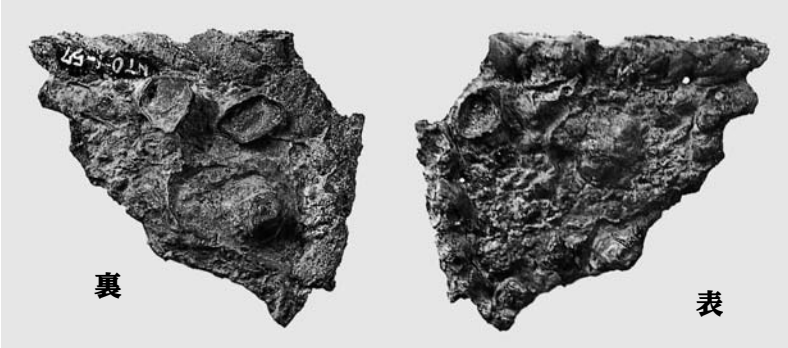


Ph.15　三尾鉄X線写真

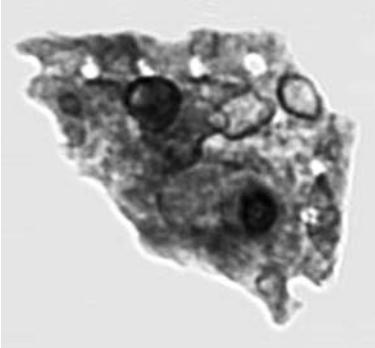


Ph.16　Fig.15帯状鉄片

Fig.15　７号墳石室出土鉄器実測図.３（S=1/2）



Ph.17　板鏡



Ph.18　板鏡X線写真

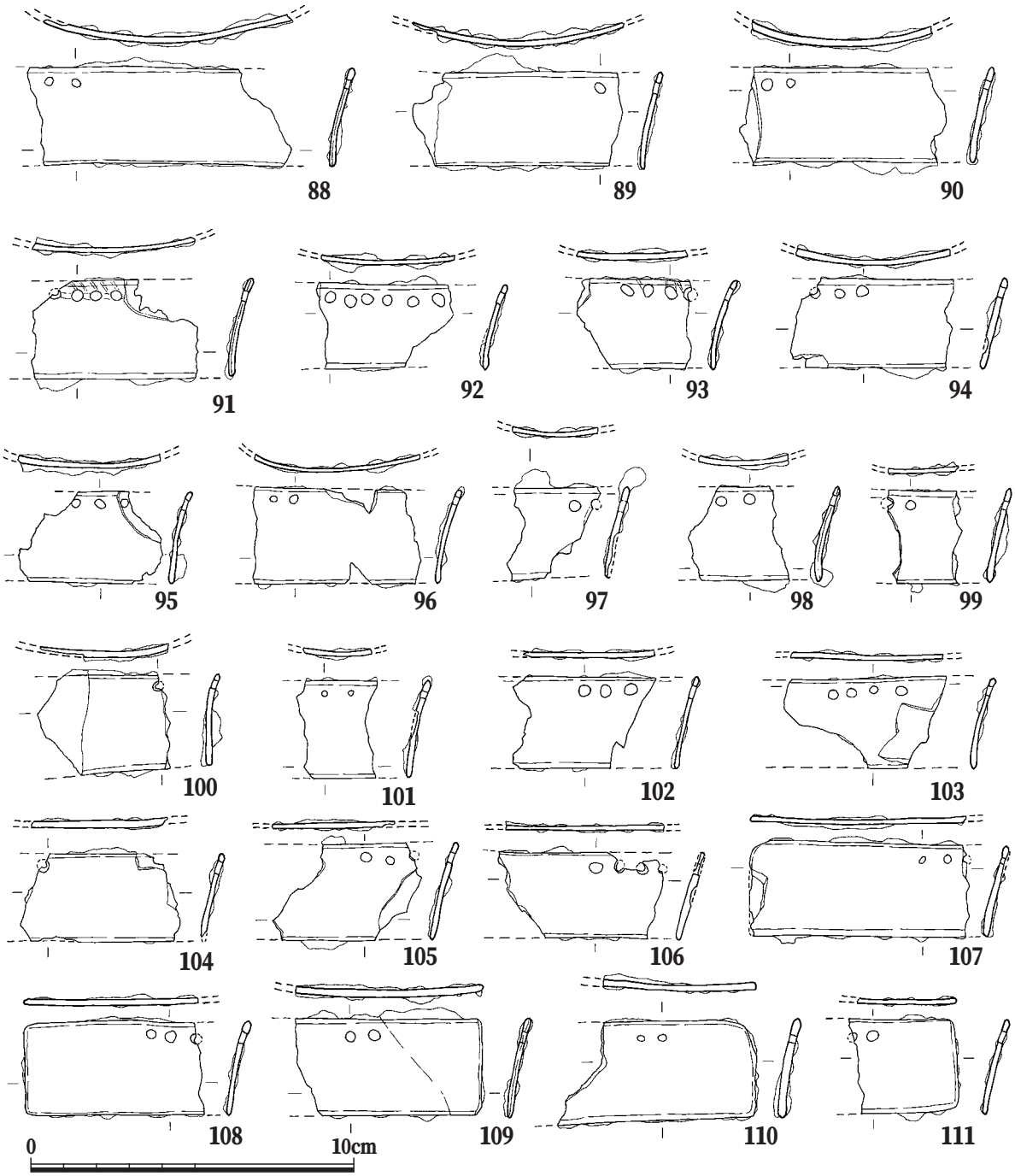


Fig.16　７号墳石室出土鉄器実測図.４（S=1/2）

けている。遺物は玄室右奥を中心に三尾鉄を含む衝角付冑残片・肩甲と思われる帯状鉄片多数と、右側を中心に鉄鏃、左手前部分に馬具がまとまる傾向にある。他に滑石製臼玉多数が左奥を中心に300点以上まとまって検出される（Fig.12）。

墓壙（Fig.12）墓壙は石室に比して大きく、幅4.1mと玄室幅の倍近い。長さは端部をトレンチで切られるため明確ではないが、トレンチの幅の中に収まるものとして、最大4.1mに復元され、正方形に近い。深さは60㎝弱と比較的浅い。

墳丘（Fig.12）墳丘は前述のとおり、誤認して剥ぎ取ってしまっており、石室に近い調査区の南と西壁面で断面が観察できる。暗黄灰色の弥生包含層上に、暗黄灰色土に地山明赤褐色バイラン土ブロックを9割以上含んだ客土が10～30㎝確認できる。端部はそれぞれ内側に幅1.1～1.4m深さ15～20㎝の浅い窪みがあり、内周溝が巡る可能性がある。外周溝の掘り込みは無い。石室を中心に復元すると径12.5m程の周溝をもたない円墳になると思われる。

出土遺物(Fig.13～18)　遺物は玄室右奥を中心に三尾鉄を含む衝角付冑残片・肩甲と思われる帯状鉄片多数と鉄鏃・滑石製臼玉多数と、近畿首長墓級の特筆すべき武具・馬具を検出した。土器は土師器小片のみで、須恵器は検出されなかった。Fig.13～17は鉄器。鉄器に関しては鹿児島大学橋本達也助教授・福岡大学桃崎祐輔助教授・同大学院西岡千絵・本市埋蔵文化財センター比佐陽一郎の各氏より、多大な助言・ご教授を賜ったが紙面がなく、全てを開示できない旨ご寛恕願いたい。33～35

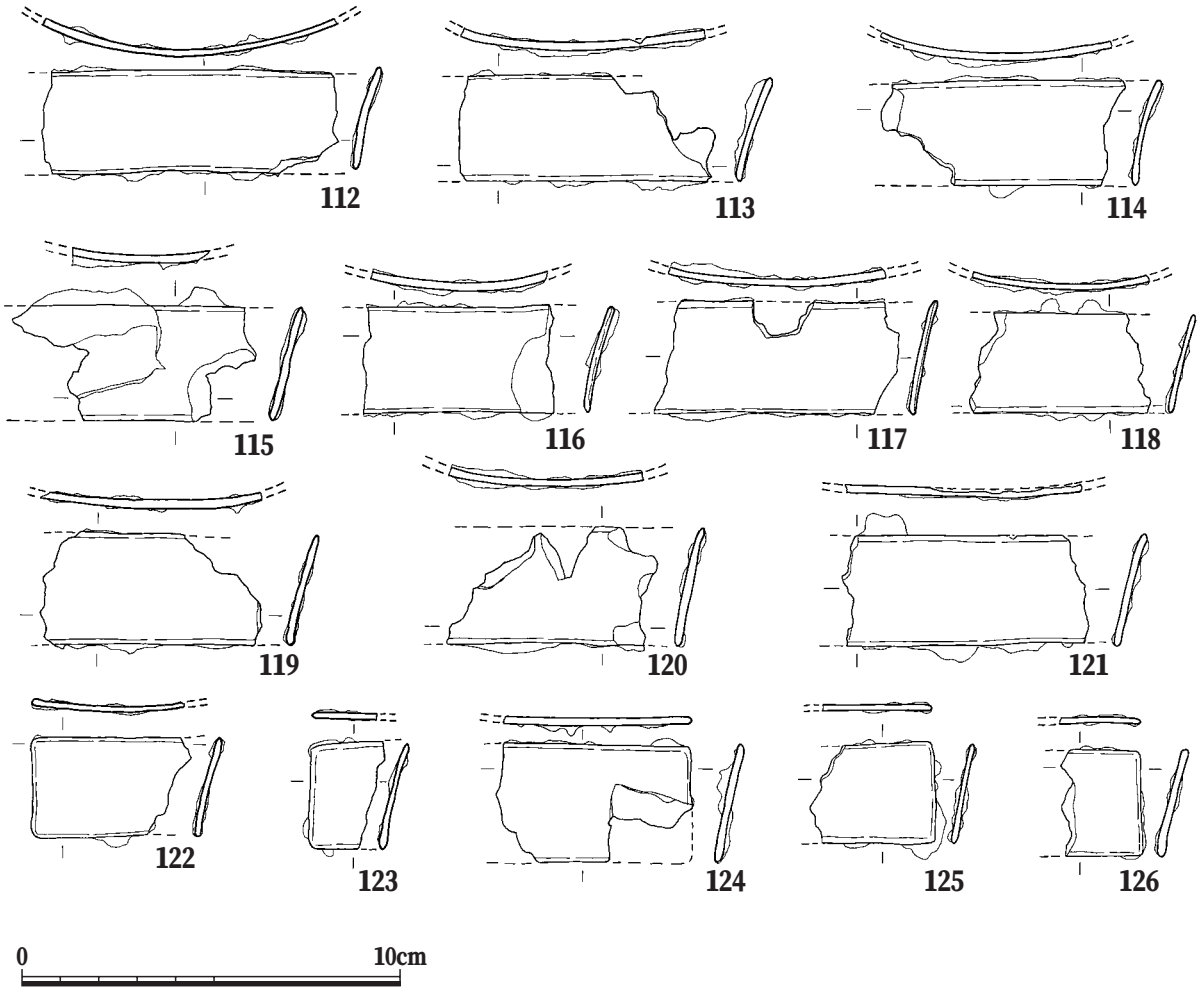


Fig.17　７号墳石室出土鉄器実測図.５（S=1/2）

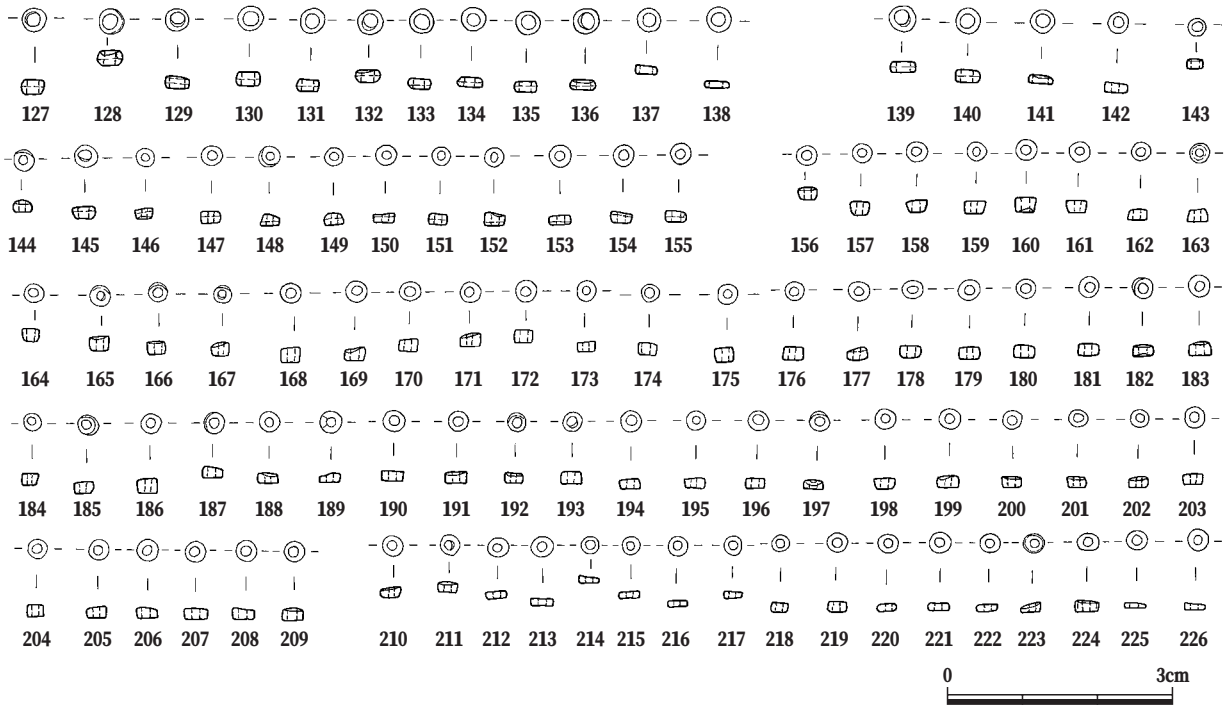


Fig.18　７号墳　石室出土　白玉　実測図（S=1/1）

（Fig.13）は鏃具で、33は全長65径6㎜。34は全長44径4.5㎜。35は全長44径4.5㎜。36～39は環状の辻金具・雲珠で、36は復元径65幅10断面内側が肥厚し4.5㎜を測る。37～39はセットの爪形金具で、何れも三鋲打で、断面方形の鋲脚は3.5～7㎜の間をとって内側に折り曲げる古式。それぞれ長さ21・15・23㎜を測る。40は28×11×3㎜の長方形板に径6.5㎜の脚円形の笠鋲２本を打ち込んだもので短甲の蝶番金具の可能性がある。41は6.5㎜残存長6㎝の細長い板で端部が直角に近く曲がる。4㎜程の笠鋲を打ち、2.5㎜の間隔をとって端部をかしめる。内面の一部に木質が残る。橋本氏は鞍の磯縁金具、桃崎氏は木心鉄板張輪鐙の柄上部を想定されている。42・43は環の断片で42は外径46断面6.5、43は外径26断面4.5㎜を測る。桃崎氏は鑣轡を想定される。44～48は釘鋲で径9～13㎜鋲脚は断面方形。幅3㎜程の皮痕跡があり、48は以下に木質が残る。49は直交する木部に1.5㎜の鉄板が付着するもの。50～74は鏃で（Fig.14）、50～65は柳葉形で長い刃部と短い頸部を持つ一群で完形に近い50で鏃長92幅15厚3㎜・51で鏃長86幅15厚3.5㎜、64の42㎜の茎部長を足すと完形で全長134～128を測る。角の立つ斜関の50・51・57～61と撫関の62～64の２種がある。52は頸部が幅広く半円形で特異である。66～74は腸抉を持つ長頸鏃で、完形に復元できないが鏃長で25～12㎜幅12～9厚4～3㎜で、頸部は48㎜以上を測る。75は太刀の関部で、厚9㎜を測る。76～78は衝角付冑の部材。76は三尾鉄で残存長112、尖頭状の胴部長74幅34厚2㎜を測り、縦横断面とも緩く内湾し、径4㎜の鋲孔を４孔穿つ。尾部は一本は欠失するが中央で残存長38幅8厚2㎜を測る。平面両側は緩く外方に開き、全て上方に緩くあがる。残存する2本の上面縦方向に径2㎜程の管状の組織が３本並列し、周囲に幅5㎜ほどの紐状組織が巻いた状態で観察される。電子顕微鏡で管状組織と紐状組織を拡大撮影したところ（Ph.14）、管状組織には矢羽根状の組織が確認された。原生の雉と孔雀の羽と比較したところ（Ph.20・21）、雉の羽に類似した矢羽根状の組織が見受けられた。また、紐状組織は破断面に扁平な不等辺三角形の空洞が多数観察され、絹糸であることが確かめられた。三尾鉄尾部３本それぞれの上面に３本単位の鳥の羽飾りを付け、絹の袋状にした紐か組紐で結い上げたものと考えられる。77は衝角の残片で、残存長52幅30厚1.5㎜を、断面角は80°を測る。角は稜を成し緩く湾曲する。78は冑の鍔の端部片で残存長45幅42厚1.5～2

㎜を測る。上縁と側縁に7～8㎜間隔で径2.5～3.5㎜の綴孔を穿ち、３本の革紐で２穴越しに通して覆輪を成す革組Ⅱ技法が施される。79～126（Fig.15～17）は幅28～33厚1.5～2㎜の帯状鉄片で、折り返して鍛接しており、剥がれて破損するものが多い。縦断面は緩い湾曲横断面は直線に近いものから8.5㎝Rのカーブを描くものまである。鉄質は極めて良好で、触れあうとガラス様の金属音を発する。Fig.15は長辺を3～4㎜折り返す一群で、上辺に孔を有するものが多いが（孔形状は全て透過X線画像より起こす）81・83は下辺に、また83は右端部を内側に折る。Fig.16は折り返しが無く孔を有する一群で91・93には覆輪の痕跡がある。107～111は端部の資料。Fig.17は孔を有しない一群で122～126は端部の資料である。全破片の上辺・下辺長の総計は985.1㎝、二分の一で約493㎝となる。橋本氏は幅が狭すぎる等の理由で肩甲を想定されている。一両で一片の長さを約25㎝・幅の三分の一を重ねたとして10枚綴って長さ21㎝。総計250㎝２両分で500㎝と近似値となる。Fig.18は滑石製臼玉。完形321点中215点が玄室左奥に集中する。外径3.4～2.2孔径1.5～2㎜前後のもの127～143（A）と外径3～2.2孔径1㎜前後のもの144～226（B）、断面を算盤玉状に面取りする127～136・139・140・144～155（a）と平坦なもの（b）の４種がある。それぞれAa13点Ab5点Ba13点Bb290点を数える。

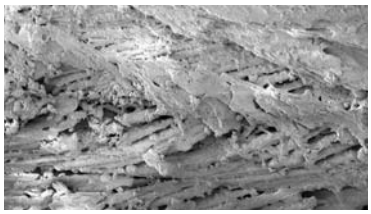
Ⅳ．小結

今回の調査では縄文時代早期・後晩期の倒木痕・自然流路等10基、弥生時代終末期の溝１条・1×2間の掘立柱建物１棟他柱穴、墳径12.5m程の古墳時代５世紀前半の横穴式石室古墳１基（長垂山７号古墳）を検出した。本地域周辺は弥生時代から漁撈・交易等海に依拠する様相の強い地域であり、掘立柱建物や溝から出土した滑石製碇・近畿系土器はこれを裏付ける資料である。

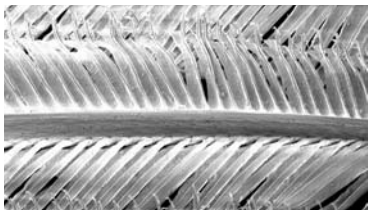
今回の調査で特筆すべきものは長垂山７号古墳の検出である。削平され石室の腰石が残る程度で、石室前半部も残っていないが、壁体を高さ30㎝前後の低い腰石３～４石で構成し、この上に幅20厚10㎝程の亜角礫を小口に積んだ古い形態で、表土剥ぎ時に出土した石材を組み合わせると、玄室幅は190㎝を測り、西に開口し奥壁は腰石3石からなり、側壁は４石長さ300～310㎝前後・奥壁から280㎝前後の位置に幅56・71高さ125・138㎝の板石を両袖に立て幅63㎝の玄門とする構造が復元可能で、柳沢一男編年Ⅱ期に該当し、福岡県狐塚古墳・久留米市木塚古墳にちかい石室と思われる。墳丘は、石室に近接する南と西の調査区壁に残された墳丘盛土から、石室を中心に復元すると径12.5m程の周溝をもたない円墳になると思われる。

さらに整理の段階で驚かされたのは玄室右奥を中心に三尾鉄を含む衝角付冑残片・肩甲と思われる帯状鉄片多数と鉄鏃・滑石製臼玉多数と、大阪府盾塚古墳・鞍塚古墳・野中古墳など近畿首長墓級・甲冑多量副葬古墳とならぶ特筆すべき武具・馬具を検出していたことである。三尾鉄は甲冑多量副葬古墳や各地首長墓のなかでも、本市老司古墳を含め、別表のように近畿中心に20古墳に限られているようで、甲冑多量副葬古墳でもなく鋤崎・丸隈山と比べて首長墓とも言えない本古墳のあり方は、畿内政権・地元首長層との関係の中で新たな階層の台頭を示すものなどであるのか今後の研究に一石を投じる貴重な資料といえる。時期は各遺物の型式からTK216並行期で、馬具は玄界灘沿岸域で最古期の評価がなされている。

整理・復元が不十分であったため、再整理が必要であり、本収蔵後本市埋蔵文化財センターにおいてさらに綿密な整理・復元がなされるので、さらなる知見・詳細は埋蔵文化財センター年報においての公表を待ちたい。



Ph.19　三尾鉄組織（×100）



Ph.20　雉羽根（×100）

Ph.21　孔雀羽根（×100）

Tab.1　市内甲冑出土古墳一覧

	古墳名	時期	所在地	墳形・規模	甲冑
1	老司	4世紀後葉	南区老司	前方後円・約75	2号石室ー三角板革綴短甲 3号石室ー籠手・三尾鉄
2	若八幡	4世紀後半	西区徳永字下引地	前方後円・約47	縦矧板革綴短甲
3	鋤崎	4世紀後葉	西区今宿青木	前方後円・62	長方板革綴短甲
4	谷上C2号	5世紀後半	西区今宿谷上	円・16	桂甲
5	かけ塚山	不明	東区蒲田北熊	不明	桂甲
6	兜塚	5世紀後半	西区飯氏字マツヲ	帆立貝・53＋α	横矧板鋲留短甲
7	羽根戸南E11号	5世紀前葉	早良区羽根戸字龍ノ下	円・7.5	三角板革綴短甲
8	長垂山7号	5世紀前半	早良区下山門字大谷	円・12.5	三尾鉄衝角付甲・肩甲

Tab.2　三尾鉄出土古墳一覧

№	古墳名	所在地	郡	町・字	墳形	長	時期	内容
1	佐野八幡山	栃木県	佐野市	堀米町	円	46	4世紀末	三角板革綴衝角付冑・一枚鎧・三角板革綴短甲
2	宇治二子山（南墳）	京都府	宇治市	宇治山本42	方?	34	6世紀初～前半	眉丸庇甲・三角鋲留短甲+小札肩甲+革草摺+頸甲+三環鈴・横矧板鋲留短甲+横矧板鋲留衝角付冑+肩甲+頸甲+籠手
3	私市丸山	京都府	綾部市	私市町丸山	円	80	5世紀後～末	三角板革綴衝角付冑・同短甲・頸甲・肩甲・革製草摺
4	妙見山	京都府	向日市	寺戸町芝山	前方後円	100	4世紀後半	小札革綴の小札
5	市尻今田1号墳	奈良県	高市郡	高取町市尾	円	22	5世紀初	三角板鋲留短甲・三角板革綴短甲+小札鋲留衝角付冑+肩甲+頸甲(+草摺?)
6	鞍塚	大阪府	藤井寺市	道明寺町	円	40	4世紀後半	三角板鋲留衝角付冑+三角板革綴短甲+三段鎧+榧当+頸甲+肩甲+脇当
7	盾塚	大阪府	藤井寺市	道明寺町	帆立貝	64	5世紀初	長方板革綴短甲+三角板革綴衝角+一枚鎧+榧当+頸甲+肩甲・三角板革綴短甲
8	珠金塚	大阪府	藤井寺市	道明寺町	方	27	5世紀初～前半	三角板革綴短甲+小札鋲留衝角+鎧+頸甲+肩甲・三角板革綴短甲+小札鋲留衝角付冑+頸甲・三角板革綴短甲・三角板鋲留短甲+三角板鋲留衝角付冑+鎧+肩甲
9	野中	大阪府	藤井寺市	野中	方	28	5世紀前半	革製衝角付冑・三角板鋲留短甲5・横矧板鋲留短甲3・三角板革綴襟付短甲3・肩甲2・頸甲2・小札鋲留眉庇付冑8・鎧3・鉄草摺1
10	豊中大塚	大阪府	豊中市	中桜塚4丁目	円	56	4世紀末	長方板革綴短甲+頸甲+肩甲+三角板革綴衝角付冑+一枚鎧・三角板革綴襟付短甲+三角板革綴衝角付冑+一枚鎧・革草摺
11	百舌天塚山	大阪府	堺市	上野芝町4丁目	前方後円	168	4世紀末	衝角付冑・短甲5・草摺・脇当
12	七観	大阪府	堺市	旭ヶ丘中町4丁目	円	55	5世紀初	衝角付冑5(三角板革綴2、小札鋲留1、他不明)、短甲5(三角板革綴、同鋲留他不明)・三角板変形革綴短甲+頸甲+肩甲・長方板革綴短甲+三角板革綴衝角付冑・衝角付冑1
13	黒姫山	大阪府	南河内郡	美原町黒山	前方後円	114	5世紀後～末	横矧板鋲留短甲12・三角板鋲留短甲10・三角板鋲留襟付短甲1・形式不明短甲1・横矧板鋲留衝角付冑8・形式不明衝角付冑3・小札眉庇付冑4・肩甲12・頸甲11・鉄製草摺4
14	室ネコ塚	奈良県	御所市	室	方	63	4世紀末	衝角付冑・短甲5・草摺・脇当三角板革綴短甲片・頸甲片
15	雲部車塚	兵庫県	多紀郡	篠山町東本荘字車ノ坪	前方後円	140	5世紀初	横矧板革綴短甲・三角板鋲留変形衝角付冑・小札鋲留衝角付冑・形式不明冑2、頸甲(他記録上に小札眉庇付冑・横矧板鋲留短甲)
16	茶すり山	兵庫県	朝来郡	和田山町筒江	円	90	5世紀初	三角板革綴襟付短甲・長方板革綴短甲・竪矧板衝角付冑・三角板革綴衝角付冑・肩甲・頸甲・鎧・革草摺
17	宮山	兵庫県	姫路市	四郷町坂元字城山	円	30	5世紀前半	横矧板鋲留衝角付冑・三角板鋲留短甲・肩甲・頸甲・4段鎧
18	老司	福岡県	福岡市	南区老司	前方後円	76	4世紀後葉	脇当・籠手?・肩甲?
19	津屋崎10号墳	福岡県	福津市	勝浦字藤三ヶ浦	前方後円	70	5世紀後～末	桂甲小札3000枚・同金銅張小札51・短甲片・横矧板鋲留衝角付冑片
20	長垂大谷7号墳	福岡県	福岡市	西区	円？	12.5	5世紀前半	不明衝角付冑・肩甲(・頸甲?)

（比佐作成を改変）

報告書抄録

ふりがな	ながたれおおたに
書名	長垂大谷遺跡
副書名	長垂大谷遺跡第1次調査
巻次	1
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	845
編著者名	加藤良彦
発行機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL092-711-4667
発行年月日	20050331

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
長垂大谷遺跡 長垂山古墳群 第１次	福岡市西区大字 下山門字大谷 1718-2外	40135	0505 0509	33 °31 ′18 ″	130 °17 ′43 ″	20030414～ 20030530	620	駐車場造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長垂大谷遺跡 長垂山古墳群	集落・墳墓	縄文 弥生 古墳	横穴式石室古墳	三尾鉄衝角付冑・ 肩甲・馬具・鉄鏃	国内20例目の三尾鉄付冑と玄界灘沿岸域最古級の馬具など畿内有力古墳に比肩する副葬鉄器群の出土

長 垂 大 谷 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第845集

2005年（平成17年）３月31日

発　　行　　福岡市教育委員会
〒810-0001　福岡市中央区天神
1丁目8の1

印　　刷　　株式会社 マリックス